

第8章 多様な文化を楽しむ

異なる文化圏の遊びは、子どもたちに新たな好奇心やときめきをもたらす。とりわけ身体表現遊びにはその文化圏の風土や慣習だけでなく、身体技法の一端が反映されている。多様な文化から創出されたリズムや表現を、五感を働かせて身体で体験することは、未知の世界へのワクワク感や異文化への憧れをかき立てるであろう。多様な文化への第一歩として、日本の文化にも親しめるよう地域の祭りや文化財をぜひ身体表現遊びに取り入れていきたい。



写真8-1 インドの音楽大学での古典舞踊の実技授業

1 英語の歌遊び

実は、日本の子どもが英語に触れることは日常によくある。朝ごはんの時には「cup」「spoon」「fork」、園では「tape」「soup」「ball」「game」等、発音は日本語的であるが、子どもたちはそれを日本語として自然に自分の言葉として覚えていく。英語は英語圏の言葉であるが、英語由来の言葉が日本語にはたくさんあるので親しみやすい。

そのような親しい言葉である英語を使った歌遊びの中でも、楽しい場面で楽しいアレンジをした遊びを3つ紹介する。一つ目は英語の歌のダンス、二つ目

QRコード

は英語の手遊び曲をアレンジしたお返事遊び、三つ目は、日本語のわらべ歌をアレンジした手遊びである。低年齢の子どもや親子での遊びに適している。

それらの遊びを通じて、別の文化をもつ英語の言葉の面白さが身体表現を通じて身体の中で響き、普段と異なる感覚を味わうことをねらいとする。

(1) ABC歌遊び

「ABCの歌」(「きらきら星」のメロディーで)の歌詞を一部変えて歌いながら、手拍子とシンプルな動きのダンスでABCの歌を楽しむことをねらいとする。

ABC歌遊び

① ♪ ABCD	② ♪ EFG	③ ♪ HIJK	④ ♪ LMN
大きな一重円になり、手をつなく。 4呼間でつないだ手をあげながら円中心に向かって歩く (二人一組でも)	4呼間で手をつないだまま、手を下ろしながら歩いて元の大きさの一重円になる	①と同じ	②と同じ
⑤ ♪ OPQRSTU	⑥ ♪ VWX Y and Z	⑦ ♪ ABCDなにつくろう?	⑧ ♪ EFGでなにつくろう?
手拍子を打つ O休み→P右上で1回打つ→Q休み→R左上で1回打つ→S休み→TU胸の前で2回打つ	VWX→両手を上に広げる Y and Z→胸の前で3回打つ	①と同じ	②と同じ

(2) おともだち どこですか

子どもの名前を呼んで子どもが返事をするという英語の遊びである。英語の歌で自分の名前を呼んでもらうことでうれしさと楽しさを味わえる。元となった「Finger Family」という英語の手遊び歌の歌詞は下記の通りである。この歌の「Where are you?」というフレーズや「Here I am」の繰り返しの面白さを生かして「おともだち どこですか」という歌にアレンジしている。

♪ “Daddy finger daddy finger Where are you?”

” Here I am, Here I am, How do you do?”

おともだち どこですか

① ♪ ○○ちゃん ○○ちゃん Where are you? 【8×1】	② ♪ you are there you are there 【8×1】	③ 「○○ちゃん！」	④ 「はいー」または「Here I am」または「Yes！」
リズムに合わせて手をたたき、歌いながら探す振りをする	友だちが見つけてその子どもの方に手を向け手のひらを上下に8回返す	全員で大きな声で名前を呼ぶ	○○ちゃんがある場で手をあげ返事をする

おともだち どこですか

岡澤 哲子
外国曲

○ ○ ちゃん ○ ○ ちゃん Where are you

You are there You are there You are there.

(3) rock and open (むすんでひらいて)

日本のわらべ歌「むすんでひらいて」を英語で歌いながら、手の動きと英語の言葉の響きを楽しむことをねらいとする。英語の響きを感じやすい単語を使用した。また⑧の「head」を「eyes」等に変えていくこともできる。

rock and open

① ♪ rock rock rock rock	② ♪ open open	③ ♪ clap clap clap clap	④ ♪ rock rock rock
両手グーを4回振る	両手パーを2回振る	拍手4回	両手グーを3回振る
⑤ ♪ one more open	⑥ ♪ clap clap clap clap	⑦ ♪ look at me	⑧ ♪ touch your head
両手を広げて	拍手4回	動かず見つめ合う	両手を頭に乗せる

4 あいうえお一遊び

QRコード

この遊びは、50音の「ん」以外の音から始まる言葉を身体で表す遊びである。遊びの大きなタイトルは「あいうえお一遊び」であるが、選択する音によって変えることができる。今日は何の音かなとワクワクできる面白さがある。言葉を示す方法は2通りある。一つ目は数枚の絵カードを作っておいてそれを保育者が示しながらコールする方法である。二つ目は同じ音で始まる言葉を3つ決めておいて保育者がどれかをコールする方法である。2通りの例を以下にあげる。

(1) 絵カードを示す方法

1) あいうえお一遊び

「お」から始まるカードの例は次の8枚である。見やすい大きさに作成する。



図9-3 「お」から始まる言葉カードの例

「あいうえお一遊び（間をおいて）おなべ！」と保育者がコールをしながら、おなべの絵カードを出す。紙芝居のように出したり、机の上に置いてあるカードを迷いながら選んだりすることでワクワク感が増す。子どもはそれを聞いて思い通りに身体で表してみる。指示がなくても子どもたちは友だち同士でくっついたり、顔を見合ったりして十分に楽しむことができる。保育者は、子どもたちの表現に対して「おなべ熱いよー」「たくさんお友だちいるんだね」等、子どもたちの表現に対して、感じたままに自然な声掛けをすることで、どの子どもにも受容されている気持ちが残るように心掛けることが大切である。カー

ドの作成にあたっては、季節や子どもたちの日常の姿に沿ったものが望ましい。「あいうえお」のどの文字から始まる言葉なのかにもドキドキする。

2) かきくけこ一遊び

方法は1)と同様である。保育者も一緒に表現することで楽しさが倍増する。

保育者や友だちのまねする子どもに対しても、「先生と（○○ちゃんと）そっくりカエルさんだね。兄弟かな？」等の認める言葉を掛けるとまねし合ったりしても楽しい雰囲気になり、苦手な子どもも参加しやすくなる。

「か」から始まるカードの例は図9-4の6枚である。見やすい大きさに作成する。

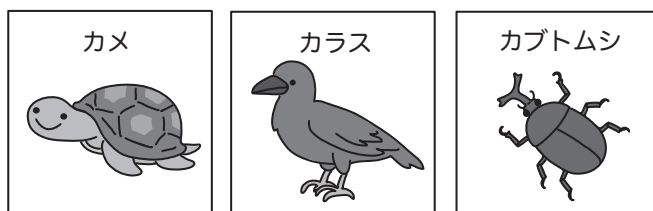


図9-4 「か」から始まる言葉カードの例

3) さしすせそ一遊び

方法は1)と同じであるが、「さしすせそ」の全てをカードにしておくところが異なる。このカードの遊びは、12月の行事の頃に行うことができる。50音の行を選べば年間の行事の中に組み入れられ、言葉への興味が高まる。



図9-5 「さしすせそ」の字から始まる言葉カードの例

(2) 言葉と動きを決めておく方法

「な」で始まる言葉の場合を例にあげる。この場合、遊びの名前は「なななな一遊び」となる。先に「な」で始まる言葉を決めておく。例として「なわとび」「なきごえ」「なまえ」をあげる。一重円で円の中心を向いて並んで座るとよい。「なななな一遊び なわとび!」と保育者がコールしたら、短縄たんじょうを持って立ち上がって1回跳ぶか跨ぐ。「なきごえ」と保育者がコールしたら、動物や生き物の泣き声をまねして3回鳴く。「なななな一なまえ 右(左、または前)」と保育者がコールしたら、右の(または左あるいは前の)友だちの方を見て名前を大声で呼ぶ。自分の名前が呼ばれたと思った子ども、「はい!」と手をあげて答える。このルールで一通り練習してから始める。いろいろな友だちの名前を呼べるように円の並び順を途中で変える。



図9-6 なわとび



図9-7 なきごえ



図9-8 なまえ

● 演習課題

課題1：子どもたちの好む絵本を読んで、その中にあるどのような言葉に子どもたちが惹きつけられているか考えてみよう。その言葉を身体で表現してみよう。

課題2：「オノマトペ」を考えられるだけ書き出してみよう。また、それらのオノマトペの状態や状況を身体表現して、どのようなオノマトペのことかを当てるクイズ遊びをしてみよう。

コラム

シアター遊びの話

平絵人形劇である立絵芝居（ペープサートの前身の呼び名）は、明治末期から演じられてきたのであるが、大正末期から昭和初期頃にかけて衰退したのは、立絵芝居から移行した紙芝居の登場がきっかけであった。

しかし戦後、永柴孝堂氏が立絵芝居をペープサートという名で新たに蘇らせ、新しい教材、教具として教育現場に取り入れられた。^{*1} ペープサートという名前は、「紙人形劇」＝「paper puppet theater」（ペーパー・パペット・シアター）を短縮した造語である。

ペープサートはいわゆる人形劇の範疇にある。日本の人形劇は、1920年代末期に多くの人形劇団が生まれ、現在ではプロ人形劇団は140を超え、2000を超えるアマチュア人形劇団がある。

これら「紙芝居」「ペープサート」「絵本」「人形劇」は児童文化財として保育の中に様々な形で取り入れられてきた。各々の特徴を活かした形で演じられたものを、子どもたちが「見て感じる遊び」として受け継がれてきた。

その中でも「ペープサート」や「人形劇」は、保育者が両手に持って演じるため、動きをより魅力的・効果的に作り出すことができる「シアター遊び」として実践されてきている。動きと保育者の声が連動するため、子どもたちの興味や関心を引きやすく、子どもの反応をストーリーに取り入れる等、臨機応変なアレンジもきくのが魅力的である。「言葉」の表現だけでなく「動き」による表現の比重も強く、子どもたちの心に働き掛けやすい特質がある。保育者が演じるだけでなく、子どもたちの発想で作って演じることも保育の中では実践されている。

「上からゆくな、下からゆくな、対等にいけ」^{*2}。この言葉は、教育紙芝居の先駆者である高橋五山（1888-1965）の言葉である。「上から」教えるようにではなく、「下から」媚びるのではなく、「対等にいけ」そうしないと本当に幼児の心と触れ合えないという紙芝居の実演の心構えを意味している。この心構えをもった保育者のドキドキ感やワクワク感、声のトーンや豊かな表情やしぐさは、子どもたちの感性に触れ、子どもたちの気付き・発見・感動につながり、表現意欲を内発的に高めることとなるであろう。

現在の保育現場では、「紙芝居」「ペープサート」「絵本」「人形劇」等の要素を取り入れ、様々な素材や道具を使うシアター遊びが幅広く活用されている。パネルシアター、エプロンシアター、手袋シアター、折り紙シアター、紙皿シアター、スケッチブックシアター等である。

*1 望月新三郎『シリーズ・親と子でつくる；9 からくりペープサート』創和出版、1989、P.5.

*2 <https://zenkosha.com/>